

## 父の思い

誠一の住む町で、高病原性鳥インフルエンザが発生したのは、平成二十三年の冬だった。四年前の平成十九年にも発生し、数万羽の鶏が処分された。平成二十二年には口蹄疫が発生し、牛や豚が処分された。誠一の父は、この町の役場に勤めており、このところ対応に忙殺されていた。

新聞やテレビのニュースでは、「鳥インフルエンザ発生」と連日報道されている。誠一の父は、口蹄疫の時と同じように、毎日誠一が夜寝ている間に帰宅して、朝目覚めた時にはもう出かけているので、ほとんど顔を合わせることはない。殺処分や移動制限区域等の防疫対策など感染拡大防止に関する仕事で、かなり忙しいようだ。新聞にも『畜産王国宮崎の危機』、『どうして宮崎ばかりが…』、『陸上自衛隊に災害派遣要請』などの見出しがどっている。誠一は、テレビのニュースで放映されている自分たちの町の様子を見ながら、大変だなあと思っていた。

誠一は、学校ではサッカー部に所属している。小学生の頃から地域のスポーツ少年団に入り、今ではチームのキャプテンも務めているほどだが、最近では、鳥インフルエンザの影響で練習や試合も中止になっている。春の大会での優勝を目標に、練習にも熱が入り、チームもまとまってきただけに、早く練習を再開したい思いでいっぱいだった。また、今度の日曜日は誠一の誕生日で、新しいサッカー用スパイクを買ってもらおう約束を何か月も前からしており、楽しみにしていた。最近父とは話す機会がないので、母に尋ねてみた。

「お母さん、お父さんは今度の日曜日のこと覚えているかな。」

「どうかしらね、今、お父さんは仕事が大変で、食事をする時間や眠る時間ねむもなかなかとれないくらいだからねえ。お父さんの仕事がゆっくりになってから買ってもらったら？」

「えー、お父さんに言っといてよ。」

ずっと楽しみにしていた誠一は、思わず不満をぶつけた。

土曜日の昼前に父が家に帰ってきた。鳥インフルエンザが発生してから先週まで、休日も対応に追われていて家にいることはなかった。最近は、青白く疲れた顔つかをしている。母が突然帰宅した父に、

「あら、今日は早かったわね。」

と聞くと、

「ああ、ちょっと具合が悪くてな。病院に行ってきた。」

と元氣のない声で答えた。

「大丈夫だいじょうぶ？」

母が、心配な様子で聞いた。

「大したことはないよ。疲れがたまっているようだ。昨日もほとんど寝ていないからな。少し寝ればすぐよくなるよ。」

と父は答えると、すぐに着替えて眠ったようだった。

ひと眠りした父は、晩ご飯を食べてから、また仕事に出かけるとのことだった。母は今日はゆっくり休むように話したが、父はもう元氣になったから大丈夫だと言い張っていた。

久しぶりに家族そろって晩ご飯を食べながら、誠一は誕生日プレゼントのことを切り出した。

「お父さん、明日はサッカースパイクを一緒に見に行つて、買ってくれる約束だったよね。」

「すまない、誠一。明日は無理だ。どうしても仕事に行かないといけない。また今度にしてくれ。」  
「約束だったのに・・・。」

誠一は、父の大変さは分かっていたつもりだったが、納得がいかにずに分かずに自分の部屋に引っ込んでしまった。

数日後、父は夕方に帰宅して誠一を久しぶりにランニングに誘った。二人で町の野球場の横まで来ると、  
「少し休もう。」

と言い、近くのベンチに腰を下ろした。誠一も隣に座って息を整えていると、父は話し始めた。

「この野球場はな、父さんの思い出の場所だ。前にも話しただろう。中学校の時、野球をやっていた話。」

「うん。」

誠一は、父から何回もその話を聞いていた。

「あの頃はきつかったけど、今思うとなつかしいよ。監督やコーチの顔、友達の前もはつきり思い出す。ここだけじゃない。向こうの河原で、夏休みにみんなで花火をしたこともあったなあ。」

父は遠くを見つめながら話していた。

「なあ、誠一にとってサッカーが大切なように、父さんにとってはこの町が宝物なんだよ。どこに行っても胸を張って言える大切なものなんだ。」

誠一は、黙って聞いていた。

「今、この町は大きな危機に見舞われている。養鶏農家はもちろん、たく



さんの人たちが苦しんでいるんだ。仕事でいろいろな人たちと話していると、本当にこれからどうやって生活していくか、不安でたまらない気持ちを抱かかえている人たちばかりだ。父さんは、宝物をしっかりと守らないといけない。みんなの笑顔えがおを取り戻もどしたいと思っているんだ。」

父の思いが伝わってきた。

春。暖かい日差しが降り注ぎ、桜が満開になった。町では鳥インフルエンザに関するすべての制限が解除された。

「練習に行ってくるよ。」

誠一は真新しいサッカースパイクをバッグに入れて、練習に向かった。

通い慣れた道から見える自分の町の風景。でも、この日の誠一には、いつもと違う風景に感じられた。